
放課後ホーンテッド

陸点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後ホーンテッド

【Nコード】

N1145W

【作者名】

陸点

【あらすじ】

“学校の七不思議”——松露高校の新聞部部长である吉良美善は、他愛のない噂話だと思ってそれを取材し始めた。噂話の間に潜む、“夜の住人”の存在を知らないまま——。

学校の七不思議 1（前書き）

学校の七不思議って知ってるかい？

ううん？ 知らないの？

だったら覚えておくといいよ。

“ 奴ら ” は夜の学校を支配しているんだから。

学校の七不思議 1

「と、言うわけでっ、今度の新聞では『学校の七不思議』を取り上げることにしたよっ！ 学舎くん、何か質問ある？」

「悪い、全然聞いてなかったわ。最初から頼む」

「えええええっ!？」

「ずこーっ、とホワイトボードの前で吉良きじが盛大にずっこける。大きな丸眼鏡がずれ、おさがが絡まった。

「もう、学舎くんが書記兼副部長なんだからしっかりしてよっ!」

「悪い悪い。で、なんの話だっけ？」

「だ、か、ら! 『学校の七不思議』だってばっ!」

眼鏡をきつちりかけ直し、吉良は「とにかく!」とホワイトボードをばんばん叩く。教室の四分の一程度しかない部室なんだから、いちいち怒鳴らなくてもよく聞こえるんだがなあ。

「最近生徒たち、特に女子の間で怪談話が流行ってるんだよ。ここ相当古い校舎だからそういう話には事欠かないし。だから今度は『学校の七不思議』の特集をすれば、いつも読まない人も手に取ってくれるかも! ……って話」

「あー、そうだったな」

俺はすかさず手元のノートに『七不思議特集〜真夏の夜のデートスポット!〜 彼氏とドキドキ 恋もドキドキ』などとメモを取った。いや、別に書くほどのことじゃないと思うが、こうしないと吉良がうるさいから。

「そうと決まれば、早速調べしなくちゃね! 学舎くん、宿題だよ? 次の部活までに七不思議を調べられる程度まで調べてくること!」

「はいはい」

ちょうど下校時間のチャイムがなり、俺たちは帰り支度をする。

「……あれ? 学舎くん、帰らないの?」

「あー、図書室に本返すの忘れててな。先に帰ってろよ」
「うん……」

吉良はどことなく寂しそうな顔で階段を降りていく。その姿が見えなくなるのを確認してから、俺も目的地に向かうことにした。

学校の七不思議、ね。

俺の名前は学舎^{がくと}学徒。吉良、吉良美善^{みよし}が部長を務める新聞部に所属している。

もつとも、部員は俺と吉良の二人しかいないので、本当は『新聞同好会』と呼ぶのが正確なのだが、吉良が強情に『部』の看板を降ろさないのだからしょうがない。

活動内容は、月一で新聞を発行し、所定の掲示板に貼り出したり図書室などに置いておくこと。掲示板から剥がされたことが一度もないことと、図書室に置いた分が全く減らないことでその人気は推して知ることができる。

まあ、こっちは好きでやってんだし気にはしていない。吉良は気にしているようだが、それならまず部員を増やして記者を増やすべきだろう。

あれは、そんな風に吉良と新聞を作るようになってから、二年目の夏のことだった。

「学舎くん、宿題はちゃんとやってきた？」

「まあな。七不思議以外にも色々調べたぜ」

「じゃあ、早速報告会ね！」

机を寄せ、ノートを広げあう。

「七不思議その一。裏庭にある桜の木で毎年誰かが首を吊る。通称“首吊り桜”」

「おお……いきなりホラーでサスペンスだね……」

「七不思議その二。夕方、三階の渡り廊下を通ると、猛スピードで走る死神に追いかけられる。通称“滑走する死神”」

「爆走とか暴走とかじゃないんだ……」

「……おい、吉良は何も調べてきてないのか？」

さつきから頷いているだけだったので訊いてみると、吉良は慌てたように「そ、そうだねっ」とノートのページをめくる。

「あつたあつた！ 七不思議その三。旧校舎には亡霊がいて、それに出会うつと一生旧校舎から出られなくなる。通称“迷いの旧校舎”だつて」

「じゃ、続いてその四。夜な夜な生物室の骨格標本が動き出して実験をしている。通称“解剖するドクロ”」

「解剖……蛙とかフナとかだよな……？」

「さあな。そういえば、飼育小屋のウサギがときどきいなくなるらしいが……」

「やめて、それ以上は言わないで！」

「……あー、悪い」

ちなみに飼育小屋は小さい穴が空いていて、そこから小柄なウサギが脱走するらしい。

「もう。七不思議その五！ 美術室には誰も描いた覚えがない絵があつて、真夜中にそれを見に行くと、絵の中に吸い込まれちゃうんだつて！ “人食い絵画”つて呼ばれてるよ」

「その六。プールで泳ぐと昔そこで溺れて死んだ生徒に足を引っ張られる。通称“溺れた人魚”」

「人魚なのに溺れちゃったんだ……。えーと、これで最後だね！

その七。使用されていない教室には幽霊が住み着いていて、ときどき別のクラスの授業に混ざつてたりするんだつて。通称“知らない同級生”」

これで七つか。

「……なんか、思ってたより怖い話が多いなあ……」

「そりゃ、七不思議だからな」

むしろ、怖くない七不思議のほうが少ないだろう。

「とりあえずこれだけだと情報が少なすぎるから、詳細も調べてきたんだが……」

「さすが学舎くん！ 我が新聞部の精鋭だけあるね！」

「精鋭と言えるほど選りすぐられてないだろ……」

部員数：二人で何いつてんだか。

「……あんまり付け加えるようなことはなかったぜ。精々、死神はローラースケートを履いてるらしいとか、同級生は願いを叶えてくれるらしいとかなんとかがうらいだ」

「死神ってローラースケート履いてるの!？」

「いや、俺に訊かれてもな……」

それはさておき、とりあえず七不思議について一通りノートにまとめる。

「うーん……やっぱり実際に取材してみるしかないのかな……」

「取材って、七不思議をか？」

「うん。百聞は一見に如かずって言うでしょ？ 聞いたことをそのまま書くより、体験したことを書くほうが読者の心を動かせると思うんだ」

おお。珍しく記者っぽいことを。

「でも、夜中に起こるタイプのはどうすんだよ。夜は当然、校門も生徒玄関も閉まってるんだぜ？」

「あ、そっか……。うーん……じゃあ、そこはわたしがなんとかしてみる」

「なんとかってなんだよ」

「なんとかするんだよっ」

説明になってねえ。

「そんなわけで、今日はこれで解散！ 七不思議については、まだ調べられることがあったら調べてね！」

「りょーかい」

まだ下校時間までは少しあるな。図書室にでも行くか……。

「ねっ、ねえ学舎くん！」

「……なんだ？」

妙にそわそわした吉良に呼び止められる。

「あ、あのさっ……今日は一緒に帰らない？ 学舎くんって、電車通学だったっけ？」

「……………」

……あー……これはまずいな……。

「悪い。今日は急用があつて早く帰らなきゃならないんだ」

「だ、だったら途中までもいいからっ。本当に一緒に帰りたいだけなのっ」

何故食い下がる。しょうがない、こうなったら……。

「あ！ 校庭でUFOがウサギをキャトルミューティレーションしてる！」

「えっ！？ どこどこ！？」

今だっ！

俺は吉良が校庭に気を取られているうちに、急いで部室から飛び出した。

「UFOなんていないじゃない……あれ？ 学舎くん？」

後ろに吉良の声を聞きながら、俺は階段を駆け昇った。

「やあ、久しぶりだね。吉良さんは元気にしてる？」

図書室に滑り込むと、くつくつと笑い声が聞こえてきた。

「いたのか、“魔女”」

「うっん？ いちゃ悪かったかい？ ひどいなあ、僕はいつだってここにいるのに」

貸出カウンターの指定席に腰かける、ボコボコとした奇妙な帽子を被った女子生徒——“魔女”は、頬杖について俺に胡散臭い笑みを見せる。

「それはそうと、今度の新聞は“七不思議”について書くんだって

？ 教えてくれたら僕も色々協力したのに」

「……どこから聞いたんだ、その話」

「まあ、“七不思議”については僕より学徒君のほうが詳しいか。あはっ、釈迦に盆踊りを教えるようなものだね」

「……………」

“魔女”は基本的に人の話を聞かない。自分が言いたいことを言えたらそれでいいらしい。

「新聞は楽しみにしてるよ。この学校の愚民はろくに目も通さないらしいが、吉良さんの書く記事は素晴らしい。是非とも続けてほしいものだ」

再びくつくつと笑い、“魔女”は俺から視線を逸らした。そして虚空を眺めたまま、「そういえば」と独り言のように呟く。

「最近、この学校の生徒が何人か失踪しているらしいね。君は何か知ってるかい？」

「いや……聞いたことはないが……」

「ふうん……だとしたら七不思議とは関係ないのか……。僕はつきり、“死神”あたりが何人かさっくり殺っちゃったのかと思ってたよ」

「どうせ、家出かなんかを大袈裟にいつてるだけだろ。二、三日もすれば戻ってくんじゃね？」

「それならいいんだけどねえ？」

意味深に微笑む“魔女”。くそ、そうやって無駄に訳知りぶって楽しいかよ。

「おっと、もうこんな時間か」

下校時刻のチャイムが鳴る。“魔女”は大きく伸びをしてカウンターから出た。

「図書委員として一応訊くが、何か借りたい本はないよね？」

「いや、ない」

時間潰しに來ただけだしな。

「そうかい。じゃ、僕は帰るよ。ばいびー」

「……………」

「ばいびー」

「ば、ばいびー」

「うん。じゃあね」

今日一番の清々しい笑顔を見せて、“魔女”は図書室から出ていった。

「……………んじゃ、俺も行くか」

図書室のドアを開け、俺は夕日が差し込む廊下に足を踏み出した。
住処に帰るために。

続く

学校の七不思議 1（後書き）

ホラーを書きたいと思いました。前に書いていたそれらしきものは思いつき場外ファールしてしまったもので。

というわけでホラーです。これから頑張ります。まかり間違えて展開が場外ファールしてしまうかもしれませんが、暖かく見守ってくださいましたら幸いです。

学校の七不思議 2（前書き）

もつとも恐ろしいのは人間だ、なんてよく言うけど。

お化けだとか幽霊は、その恐ろしい人間が死んで生まれてくるわけなんだよねえ。

学校の七不思議 2

吉良美善きり みよし まつろが松露高校に入学してきたとき、彼女が入ろうとしていた新聞部は既に廃部となっていた。

なんでも、前年の卒業生が最後の部員だったらしい。その年の文化祭で、展示されていた新聞を見て進学を決めた吉良にとって、それは想像だにしていない事態だった。

だが吉良は諦めなかった——彼女は見た目ほど、大人しそうな優等生ではなかったのである。

部員が二人以上集まれば部活動成立、という甘すぎる基準に目をつけた彼女は、早速部員勧誘を始めた。

だが、物事はそう上手くいかないもので、入学してただか数日の彼女には頼る人もコネもなく、部員は全く集まらなかった。

そんなときだった。彼女が“知らない同級生”の噂を聞いたのは。

放課後になり、いつものように部室へ行くと、部室の前で吉良が誰かに叱られていた。

「まったく、何を考えているんだ？　いくら取材でも夜中に学校に入るなんて、許可できるわけないだろう」

「すみません……」

見かけは二十代後半で、くしゃくしゃの天パ……確か、浦賀真先ついでまこ生、だったか？　二年の英語を担当していたような気がする。

「先生、どうしたんですか？　うちの部長がなんかやらかしましたか」

とりあえず声をかける。

「ん、君は……」

「学舎まなびやです。新聞部員やってます」

「学舎君か。念のため君にも言うておくが、夜に出歩いたり学校に

忍び込んだりするんじゃないぞ。最近、物騒な話が聞こえてくるからな」

そういえば昨日“魔女”が何か言ってたな。失踪がどうか……。

「それから君」

「なんすか？」

「前髪は切ったほうがいい。みつともないぞ」

「……………はい」

ほっとけ。

浦賀先生はそれだけ言うと、部室の前から去っていった。

「うーん……………やっぱり駄目かあ……………」

「一瞬でも駄目じゃないと思った根拠を知りたいよ、俺は」

まさか先生にストレートに頼むとは。

「こういうとき、普通はどっかの鍵を開けておくとか、思いきって合鍵を借りるとか、そういうもんなんじゃないか？」

「そんなの駄目だよ。勝手に学校に忍び込むなんて犯罪じゃない」

「……………」

俺はときどき、こいつは善人なのか、それともただの度を越した馬鹿なのかわからなくなるときがある。

「……………だったらもうどうしようもないだろ。夜の取材は諦めたほうがいい」

「だっ駄目だよっ！ 諦めたらそこで取材は終わっちゃうんだよ！？」

……………やっぱこいつ馬鹿だ。

「じゃあどうすんだよ！ お前は一体どうしたいんだよ！？」

「わわっ……………ごめん……………」

「謝らんでいいからさっさと考えろ！」

「はい……………」

はっ、いかんいかん。怒鳴ってどうする。

「……………あー、すまん。言い過ぎた」

「うっん、わたしも全然考えてなくてごめんね。そろそろ、部室に

入る？」

「そういや、まだ廊下で話してたんだったな。部室に入って、いつものようにノートを広げた。」

「うーん。先生にも駄目って言われちゃったし、取材は放課後だけにしようか。あとはもつと情報を集めて、写真つきで紹介するの」

「やっと吉良がまともなことを言った。」

「まあ、それが妥当なことだろうな」

「そうと決まれば、早速取材だよっ！」

「もう行くのかよ」

「即断即決ってレベルじゃねえぞ。」

「あんまりぐだぐだしていると、記事を書く時間がなくなっちゃうからね。学舎くんも歩き回る準備してね？」

「はいはい」

せつかく出したノートは速攻でしまふ羽目になった。

裏庭にある一本桜、通称“首吊り桜”の噂。

昔々、まだこの土地に松露高校が建ってなかったころ。

とある恋人たちが些細なことで痴話喧嘩を起こし、カッとなった男のほうで女を殺してしまった。男は恐ろしくなり、誰にもバレないように人気のない野原に女の死体を埋めた。

しばらくして、そこには鮮やかな花が咲く桜の樹が生えた。周りには桜どころか樹もろくに生えてないような原っぱだったが誰も気に止めず、そこは花見の名所となった。

桜が生えて何度目かの春、男がその桜の枝に首を吊って死んでるのが発見された。言うまでもなく、女を殺した男だ。

家族に訊くと、桜が生えた頃から「別れた女が夢枕に立って恨めしそうに睨んでくる」という夢を頻繁に見ていたらしく、死ぬ数日前はつわ言のように「女が、桜が……」と呟いていたらしい。

きつとそれは祟りだ、女は殺されたのを恨んで男を祟り殺したの

だという話になり、それからその樹に近づく者はいなくなった。
首が吊られた日の桜は、いつも以上に鮮やかな赤色をしていたと
いう。

「……そんなおどろおどろしい逸話があっただねー……」

吉良が桜にデジカメを構えながら呟いた。当たり前だが、花はもう咲いていない。

「逸話ならまだあるぜ。この樹の前で一緒に弁当食ったカップルが数日で別れたとか、ここで告白すると両思いでもフられるとか、彼女に酷いフリ方した奴がここで首吊ったとか」

「うわ、逆伝説の樹、って感じだね……」

一方で、モテない奴らからは“御神木”として崇められているらしいが、それはまあ関係ないな。

崇ると崇める。字面が妙に似てるな。

「でも、本当に立派な樹だね。樹齡はどのくらいなんだろう？」

「さあなあ。校舎が建つ前だから、少なくとも五十年以上だろうが桜の平均樹齡はどれくらいなんだろう？ 俺はソメイヨシノは短命なことくらいしか知らない。」

（カップルを別れさせちゃう気かあ……わたしと学舎くんはまだ付き合っていないし、告白もしていないから大丈夫だね、うん）

「ん？ 吉良、今なんか言ったか？」

「う、ううん！ なんでもないよ！」

拳動不審気味に首を振る吉良。おさががぶんぶん揺れていた。

「……あれ？」

「どうした？」

吉良が俺の後方を指差す。

「あそこ、煙が出てない？ 火事ってわけじゃなさそうだけど……」
確かに、少し離れたところから一筋の細い煙が昇っていた。

「この季節に焚き火、つてわけでもないだろうし……気になるな。行ってみるか？」

「うん」

そこに近づくにつれて、煙に混じって妙な臭いがするようになった。炎天下に数日放置した生ゴミを焼いてるような、臭くて気分が悪くなる臭いだ。

「……なあんだ。焼却炉に火が点いてるだけだね」

煙は昔なつかしの、ドラム缶のような形をした焼却炉から出ていた。どうやら何か焼いているらしい。

……………ん？

「妙だな……この焼却炉、とうの昔に使用禁止になってたはずだぞ。第一、何焼いたらこんな臭いが湧いてくるんだ？」

紙や木じゃこんな臭いにならないはずだし、調理実習で出た生ゴミは専用の機械で肥料にされてたはずだ。

「え？ ちよつと、何してるの、学舎くん！？」

「何って……開けるんだよ。なんか嫌な予感がする」

焼却炉の蓋の取っ手部分は金属で出来ていて、触れたら火傷しそうだだったので、適当な棒で引っ掛けて開けることにした。

「嫌な予感がするなら止めとこうよ……」

「嫌な予感が外れであることを確かめるためにやるんだぜ？ ここで止めたらモヤモヤするだろ」

吉良の正論をシカトして、近くに落ちていた太めの枝で取っ手を引っ掛け、開ける。

「っ……………」

大量の煙と熱が吹き出し、思わず顔を逸らす。数秒もしないうちに煙は薄くなり、俺たちは熱い炉の中を覗きこんだ。

「……ひ、イツ、いやああああああああああっ！」

吉良が悲鳴をあげ、その場に座り込んだ。正直、俺もそうしたい

気分だった。

「……なんだよ。なんなんだよ、これは……ッ!？」

いや、“それ”の正体なんて一目瞭然だ。俺はその事実を認めたくないだけだった。

炉の中で未だ燃え続けるその肉塊は、ヒトの足首の形をしていた。

しばらくして落ち着いた俺たちは、先生がたにこのことを報告した。

なかなか信じてもらえなかったが、吉良がデジカメで撮った写真を見せた途端職員室は騒然とした。

噂になつたらまずいのだろう、このことは他言無用だと釘を刺され、俺たちは下校させられることになった。

「でも、結局……その、誰の足だったんだろっね、あれ……」

下駄箱に行く道すがら、デジカメを握り締めたままの吉良がそう呟いた。

「さあ？ 多分、行方不明になった“誰か”じゃないかな？」

そう答えたのは俺ではない。目の前に、いつものように不格好な帽子を被った女子が立っていた。

「“魔女”……」

「かなぎ 鮑木さん……」

“図書室の魔女”こと、鮑木真女まなのお出ましだった。

「お前、どうしてそれを……」

「ちよつと職員室の前を通りかかったら聞こえてしまつてね。大丈夫、誰にも言わないよ」

全然信用できない笑顔だった。こいつ、ゴシップとか噂とか好きなんだよなあ。

「心配しなくても、警察の皆さんがどうにか身元を捜してくれるだろうさ。ま、あの先生たちがちゃんと通報したらの話、だけどね」

「何言ってるの、鮑木さん。通報しないわけないじゃない。事件なんだよ、ジケン」

“魔女”の皮肉がわからなかったのか、真剣な顔で吉良が反論する。

「あ……うん、そうだね」

“魔女”も対応に困ったようで、曖昧な顔で返事をした。

「ところで、ちょっと学徒君を借りていいかな？ 頼みたいことがあるんだ」

「学舎くんには？ だったら、本人に訊きなよ」

「ごもつともだ。」

「俺は別に構わないが……」

「じゃ、一緒に図書室まで来てくれないかな？ そういうわけで吉良さん、また明日。新聞、楽しみにしてるよ！」

「えっ、あ、うん。また明日ねー」

吉良は何故かどことなく悔しそうな顔で手を降っていた。

「……さて。君が吉良さんを撒けなくて困っていたようだったからこうさせてもらったが、これで良かったかな？」

「……あー、正直、助かった」

いつもだつたらなんだかんだ言い訳してやりすごすのだが、今日は上手い言い訳が見つからなくて参っていた。最近は特に、吉良が何故か一緒に帰りがるし。

「……もしかして本気で気づいてないのかい？」

「ん？ 何がだ？」

「………なんでもないよ。それにしても、まさか死体を焼却炉で焼くとはね。単純だが実に効率的な処理方法だ。焼いてしまえば、大抵の証拠は残らない」

“魔女”が帽子を被り直しながら言った。

「なんの話だ？」

「例の“足”の話さ。僕は十中八九、あれが行方不明の生徒の誰かのものだと思っている。ついでに言うと、その誰かを殺して足だけ

にしたのは、この学校に通う誰かだとも」

「……やめてくれよ。推理ごっこならコナンでも読んでろ」

「ううん？ 僕は本気だよ？ だって怖い話じゃないか。いつか僕や吉良さんだって“行方不明”にされるかもしれないんだよ」

確かに“魔女”の目は本気だった。

「でも、あれがお前の言う“行方不明”の奴とは限らないだろ。そもそも、本物の人間の足だったのか？ 誰かが悪戯で、生肉かなんかで作った偽物だっておかしくない」

「ううん？ 自分で見たことを疑うのかい？」

「なんでもかんでも悪い方向に結びつけるよりはマシだろ」

人を疑うより自分を疑ったほうが、社会で目立たず過ごせるのだ。「ふうん。学徒君は卑屈だねえ。まあ、すぐにわかるさ。あの足は誰のものだったのか、誰がどうして焼却炉に足を捨てたのか、ね」

「だいたいいいけどな……」

“魔女” 鮑木と歩く廊下。

そこから見える裏庭の桜は夕焼けに染まって、赤い花びらが満開に咲いているように見えた。

学校の七不思議 2（後書き）

今ひとつ怖くありませんが、いよいよホラーっぽくなってきました。次回もこんな感じで七不思議を巡ったり足の謎を追ったりする予定です。

学校の七不思議 3（前書き）

幽霊の正体見たり枯れ尾花。

妖怪だの八百万の神だのの大半は、そういった錯覚や勘違いから生み出されたものだ。

ま、だからといってそういう存在が全て架空の存在と決め付けるのはまだ早いよ。

幽霊は案外、枯れ尾花の下に隠れているだけかもしれない。

学校の七不思議 3

俺たちが例の“足”を見つけた翌日、案の定というかなんというか、校内はその噂でもちきりだった。

「やっぱり言い触らしやがったな、“魔女”の奴……」

人の口に戸は立てられない、ってやつなのか？

まあ、見つけたのは俺たちだという情報が広まっていないのは、あいつなりの優しさなのかもしれないが。

「いっそ、今度の記事は七不思議よりも“足”について書いたほうが読んでもらえるかもな？」

ほんの冗談のつもりで、吉良にそう言ってみた。すると、吉良は本気にした顔で、「だ、駄目だよ！」と言う。

「最近、暗い出来事が多いから、せめて校内新聞くらいは平和で、読んだ人が元気になるようなものを書かなくちゃ！」

あんまり必死な顔だったから、思わず少し笑ってしまった。「なんで笑ってるの！」と怒られた。

ほんと、頭に『馬鹿』を三つくらいつけても足りないくらい真面目だよなあ、こいつは。

……しかし、七不思議は平和で読んだ人を元気にできるような話題なのか？

ま、それはさておき。

俺たちは三階の、東校舎と西校舎を繋ぐ渡り廊下に来ていた。例の、“滑走する死神”に追いかけられる廊下である。

「見た感じ普通の廊下だよな」と、吉良が言う。

「なんでそんな物騒な噂が広まってるんだろう？」

“死神”の噂。

夕方、この廊下を通ると、背後からシャツ、シャツと何かが滑るような音が近づいてくる。

振り向くと、そこには誰もいない。気のせいか、と思って再び歩

きだすと、やはりシャーツという音がする。

この音が近くまで来ないうちに廊下を渡りきればいいのだが、もし追いつかれ、音が自分の前方から聞こえてくるようになったら――その音の主、すなわち“死神”に殺されてしまうのだという。

だから、この廊下を通るときは、なるべく立ち止まらずに急いで通らなければならない、らしい。

他にも、“死神”は真っ直ぐにしか進めないから、追いつかれそうになったら曲がり角を曲がったり教室内に入ったり階段を昇り降りすると撒けるとか。

「なんで真っ直ぐにしか進めないのかな」

「さあな。ローラースケート履いてるから、とっさに曲がれないから、って聞いたが」

シャーツという音もローラースケートの音なんだろう、きっと。

「でも、何回か夕方にここを通ったことはあるけど、そんな音聞いたことないなあ」

吉良がデジカメを取り出しながら言った。

「多分、風の音だろうな」

「風？」

「ああ。ちょっと待ってろ」

廊下の片側の窓を少しだけ開けていく。大体開け終わり、少し待つ。今日は風が強かったし、多分大丈夫なはずだ。

しばらくすると風が吹いてきた。

シャアアアアアアアアア――

「こ、この音……！」

「枝がどつかを引っ掻いてんのかどうなのか、音の出所はよくわかんねえが、ここは風が強い日だとかこういう音がするんだよ。この音を聞き間違えた奴が広めたんだろうな」

「……でも、なんで夕方なんだろう？」

「知らん。朝とか昼とかじゃあんまり雰囲気出ないからじゃね？」
こういう類いの話は、大体夕方から真夜中って相場が決まってる
しな。

「うーん……あんまり釈然としないけど、まあいつか」

吉良がシャッターを切った。

「じゃあ、次に行こつか。次はどこだっけ？」

「あー、次は確か――」

お次はここ、旧校舎だ。

昭和一桁代に建てられたかのような、古び、朽ちた木造校舎。と
うの昔に立ち入り禁止になっていて、玄関にはきっちり鎖と南京錠
が巻かれていた。

「入るのは難しそうだね……」

「窓も雨戸なので封じられてるし、こりゃ無理だな」

壁はボロボロなので何回か体当たりでもすればぶち破れそうだが、
それはいくらなんでもそれはまずいだろっし。

「“迷いの旧校舎”……だったっけ。確か昔、まだ立ち入り禁止じ
やなかった頃、ここに女子生徒が迷いこんで、それっきり見つから
なかったって……」

「それ以来、一度旧校舎に入ると死んでも出られなくなったって言
うが……これじゃ、入るも何もないよなあ」

そんな噂がたったから、こうして立ち入り禁止になってるのかも
しれないが。

「とりあえず、写真だけでも撮らなくちゃね。ここ暗いから、フラ
ッシュ焚かないと……」

吉良がデジカメをいじりだした。ただでさえ北側なのに、太陽を
遮るような位置に東・西校舎が建っているので、まだ日が沈んでな
いのにかなり薄暗い。

「はい、チーズ……って、あれ？」

「ん？ どうした？」

吉良がデジカメの画面を覗いて首を傾げている。

「今、玄関の内側に誰か立ってなかった？」

旧校舎の大半の窓は中が見えないようにされているが、玄関の扉のガラスだけはそのままの状態だった。

「さつき、フラッシュ焚いたとき、一瞬誰か居たような気がするんだけど……」

「気のせいじゃないか？ フラッシュの反射光で、俺たちがガラスに映っちまったとか」

「そうなのかなあ？ うーん……」

吉良は納得がいかないらしい。

「考えたってしょうがないだろ。次行こうぜ、次」

「う、うん……」

未だ玄関を気にする吉良を引きずるようにして、俺たちは旧校舎を後にした。

次の七不思議スポットである生物室に向かおうとしていた俺たちだったが。

「ねえ、あれ浦賀先生じゃない？」

吉良が指差したのは飼育小屋のほうだった。特徴的な天パ頭が飼育小屋の隣で何かしている。

「浦賀先生、何してるんですか？」

吉良が近寄って声をかけた。俺も近寄ると、浦賀先生が顔を上げる。

「ああ、君たちは確か新聞部の……取材でもしてるのか？」

「そんなところです。先生は？」

先生は握っていたスコップを俺たちに見せた。

「お墓を作ってるんだ。ウサギのな」

「ウサギの……？」

「最近、ウサギがパタパタ死んでるんだ。何か病気が流行ってるのかもしれない」

浦賀先生はウサギの墓穴を掘っていたらしい。穴は結構深く、一メートルくらいは掘っていた。

「そうなんですか……ウサギさん……」

吉良はウサギみたいなふわふわした動物が好きらしいから、結構ショックなのだろう。

「でも、ちよつと深く掘りすぎじゃないっすか？」

「はは……つい掘るのに熱中しちゃってな」

あー、あるよなそんなこと。嫌々草むしりしてたらいつの間にか楽しくなっていたり。

「もうすぐ死骸を埋めるから、君たちは早く帰りなさい」
「はい」

浦賀先生に追い払われる。まだ帰るつもりはないが。

「ウサギが次々に死んでく病気……ちよつと怖いなあ……」

「確かに少し不気味だな」

たとえ小動物でも、死骸を見るのは気分が悪い。ウサギのことを話しあいながら、今度こそ俺たちは目的地に向かった。

「あれ？ 生物室、鍵が掛かってるよ」

俺たちがぐずぐずしているうちに、生物室の扉は閉められてしまったようだ。

「しょうがないな。そろそろ下校時刻だし、明日にしようぜ」

「そうだね」

俺たちは部室に戻る。校内に人気はほとんどなかった。

「な……何これっ！？」

俺より先に部室に入った吉良が、驚いたような声をあげた。
「どうした？」

次いで、俺も部室に入る。

「これは……！」

部室が、まるで強盗に入られたように荒らされていた。

机が倒され、床に資料が散乱している。棚にしまっていた本や新聞はぐちゃぐちゃで、元の状態を保っているものはほとんどなかった。

「何これ……何これ……ひどいよ……。部室がしっちゃんめっちゃじゃない……」

吉良がへなへなと座り込んだ。

「イタズラにしても酷いな……」

「一体、誰がこんなこと……」

誰がなんのためにこんなことをしたのか。それは今のところ知りようがない。俺たちが今するべきことは、この惨状を片付けることだった。

「もう、犯人が見つかったらぎゃふんと言わせてやるんだからっ！」

「ぎゃふんてなんだ、ぎゃふんって」

「ギニヤーとか、グエーツとかでもいいけど」

「昭和のギャグ漫画かよ」

軽口を叩きあいながら掃除する。机を元に戻していると、机の中に、何か紙切れが入っていることに気がついた。

「……………」

取り出して広げみると、ボールペンで英文が殴り書きされていた。

『Curiosity killed the cat!』

「く、くりおしてー……？」

駄目だ、わからん。英語はいつも苦手だ。辛うじて『』が猫を殺した』までは読めたが……どちらにしろ、あまり良いニュアンスの言葉ではないようだ。

「? どうしたの? 学舎くん」

「あー、いや、なんでもない」

吉良のことだから、『猫を殺す』という部分に妙な反応を示しそうだ。俺はとつさに紙切れをポケットに突っ込んだ。

後で鮑木あたりにでも意味を訊くしよう。

「鮑木、これなんて読むかわかるか？」

吉良と別れ、例のごとく図書室にいた“魔女”にあの紙切れを見せてみた。

「キュアリオシティ・キルド・ザ・キャット……ふうん？」

鮑木がいつも異常にニヤニヤ笑ってこちらを見てくる？

「なんだよ？」

「いや……君たち、どうやら誰かから恨みを買っているらしいねえ？」

「……どうということだ」

鮑木はカウンターから立ち上がり、本棚に向かう。持ってきたのは、『英語ことわざ慣用句辞典』という辞書だった。

「『Curiosity killed the cat』……邦

訳すると、『好奇心は猫をも殺す』だ」

「好奇心が、猫を？」

「聞いたことないかい？ 猫は九つの魂を持っていると言われていた。奴らなかなかしぶといから、そんな非科学的な迷信が生まれたんだろうね。」

で、Curiosity——好奇心以外にも詮索という意味があるけれど、つまり、そんな不死身の猫であっても、余計な詮索するのは命取りだ、という意味だね」

「……………」

「ま、噛み砕いていうと、これを書いた人は君たちに『余計な詮索はするな、分をわきまえろ、藪をつつくな蛇出すな』と言いたかったんだろうね」

冷水を浴びせかけられたような気分だった。

「……これを書いた人のあてはあるのかい？　正直、君はまだしも吉良さんが恨みを買うとは思えないんだが」

恨み……部室を荒らしてこんな警告文を残しておくような動機……

「……“足”、だろうな。他に心当たりはない」

「まあ、そんなとこだろうねえ。ヘタレで卑屈な学徒君が、人を傷つけられるわけがないもの」

「……それは言い過ぎじゃないか？」

しかし反論はできない。

「じゃあ、精々気をつけなよ。君はともかく吉良さんは弱い女の子なんだから、守ってあげないとねえ？」

こいつはどうして当たり前のことをここまで癪に障る言い方で言えるのだろうか。

「……お前だって女の子だろ。夜道には気を付けろよな」

「！」

鮑木が突然赤面した。

「な、なんだ。僕のこと気にかけてくれるんだ？」

「まあ、そんな言動でしかもちんちくりんな帽子被ってるような女、誰も襲わないだろうけどな」

「……さっきのときめきを返してくれないか……？」

落胆した様子で図書室から出ていく鮑木。ちよつと言い過ぎたかもしれない。

それにしても……『好奇心は猫をも殺す』か。

もしかしたらあのとき俺は、パンドラの箱でも開けてしまったのかもしれない。

……箱に残っていたのは明らかに希望から程遠いものだったが。

学校の七不思議 3 (後書き)

怖さが出せない…
頑張ります。

学校の七不思議 4（前書き）

不気味の谷って知ってるかい？

ほら、人間を模したモノが、あんまりにも人間に似すぎているとそれに恐怖を感じてしまうってヤツさ。

人形とか、最近開発されているリアルな人型ロボットとかね。

ヒトじゃないくせにヒトを真似ているなんて、確かに不気味だよな。でも、なんでだろうね？

ヒトがモノを真似るのは、滑稽にしかないのは。

学校の七不思議 4

埃が積もる床の隅を、小さなクモが這っていくのが見えた。

……うつうつ、と喉から声が漏れる。どうして、どうしてこんなことに……！

自分は今、追い詰められている。まだ事件が完全に明るみになっていないからぎりぎりでなんとかなっているが、このままではいずれ……。

くそっ、この間までは上手くいっていたのに！ あんなミスを犯してしまったばかりに、自分の運命はいまや風前の灯火だ。安っぽい教訓じみた状態だが、いざ体験してみるとそんなことは言っていられない。反省する時間も後悔する猶予も残されていないのだ。

……待てよ？ どうして自分が、反省や後悔なんてしなければならぬんだ？

元はといえば、あの二人のせいじゃないか。新聞部の取材だからんだか知らないが、校内を歩き回った挙げ句、余計なことをしてくれた。せめて大人しく黙っていればいいものを、学校中に触れ回って。現在のピンチはあの二人がもたらしたもののじゃないか。

焦りに代わって怒りが首をもたげてくる。そうだ、あいつらのせいだ。あいつらのせいで……！

あいつらに報いを与えてやらなければ。反省や後悔をするべきなのは、あいつらだ。

足元を這っていたクモを思いきり踏みつけて、自分は立ち上がった。

生物の先生の許可を得、俺たちは放課後生物室に入ることができた。

「でも、嘘ついちゃったね……」

「しょうがないだろ。『夜動くともつぱらの噂の骨格標本を取材しに来ました』で許可貰えるわけないだろ」

だから、『生物室で飼っている動物たちを新聞で紹介したいので』と真つ当そうな理由をでっちあげたわけだが。

「そのうちちゃんと記事にしたら、嘘にはならないよね」

本当に真面目な奴だなあ。どうせ誰も読んでない新聞なんだからバレやしないのに。

そんなことを考えながら生物室の奥、部屋の隅にひっそりと隠されるように据えられた骨格標本の前に立つ。

二メートル前後の木製ケースの中に、バラバラの骨を針金や金具で繋ぎ、人の形に整えてある標本が入っている。この標本、どういうわけか白衣が羽織らされていることから、一部の生徒からは『D・ドクロ』というダジャレじみた愛称で親しまれているらしい。

「確か、この骸骨は本物の人骨でできている、って噂があるんだっ たね」

吉良が、骨格標本から微妙に視線を逸らして言った。

「ああ。なんでも、生前は人を解剖するのが大好きなマッドサイエニティストで、だから夜な夜な動き回って、生物室に近づいた人間を捕まえて解剖する……って噂もあるな」

「……前聞いた時よりも話がおどろおどろしくなってない？ 話がぐつと詳しくなってるし」

俺に言われてもな。この手の噂は尾ひれが付きまくるもんだし、聞いた話を総合したらそりゃ詳しくもなる。

「でも、本物の骨から標本って本当に作れるの？ 普通、遺骨って焼いちゃうでしょ？ それに、その噂が本当ならそんなものがなんでこの学校にあるの？」

「だから、俺に訊くなって」

ただの噂に整合性なんて求めるな。

「……ただの噂ってわかってても、やっぱり不気味で怖いなあ。早く写真撮って出よう？」

吉良が骨格標本に向かってシャッターを切ろうとしたそのとき、骨格標本の顎の骨が、ケタタタ…、と鳴った。

「ひゃあああっ!？」

吉良が両生類に触られたかのような悲鳴をあげた。

「まッ、学舎くん……今、骨が……ッ!」

「……落ち着け。風かなんかで揺れたんだろ」

「え……でも……なんで顎の骨だけ……」

「それよりいいのか。今の写真、確実に手ブレしてると思うぞ?」

「……あ、……ああっ!」

デジカメのファイルを確認した吉良が、さつきとは違う意味で悲鳴をあげた。

「ブレブレだあ……これじゃあ超色白のガリガリに痩せた人にしか見えないよ……。撮り直さなきゃ……」

「どんなブレ方したらそう見えるようになるんだ?」

ともかく、なんとか吉良の気を逸らせられたようだ。

たかが骸骨が動いた動かないで時間を潰してもしょうがないからな。

「それで、今度はちゃんと撮れたのか?」

「うん、ばっちり!」

さつきの出来事をすっかり忘れたように、なんとなくタンポポを思わせる顔で吉良が笑う。

「そりゃよかった」

こんなこと本人には照れ臭くて言えないが、俺は吉良が撮った写真が好きだ。プロのようにしつかり的を射ているわけではないが、ややピントがボケたその世界は、現実よりも優しく穏やかそうに見える。

俺がもし新聞部に入らず、新聞部が成立していなかったら、吉良は写真部に入っていたんじゃないだろうか。

もしもの話を考えたってしょうがないが。

「次は美術室だったな。さっさと行こうぜ」

「うん！」

生物室を出ていく間際、俺は例の骸骨を一瞥した。
まったく、余計な手間を取らせやがって。

美術室には普通、有名な絵画や彫刻のレプリカや、生徒が作った作品が展示されているものらしい。

しかし、この松露高校の美術室には、一点だけ、真正銘本物の美術品がある。

それが題名『舞踏会の淑女』、通称“人食い絵画”だ。

内容はタイトルの通り、華やかな舞踏会の中、美味しそうな料理が載るテーブルの前で一人微笑む青いドレスの女性を描いたものだ。誰が描いたのかは不明。少なくとも美術を習って十年もないような高校生が描けるものではないだろう。昔の美術の先生が描いたのを飾っただけとか、どうせそんなことだと思う。

で、噂によると、この絵には悪霊が取り憑いており、真夜中になると本性を現してその時間まで学校に残っていた不届き者を絵の中に引きずり込んでしまうらしい。

舞踏会の様子をよく観察すると、何人が舞踏会に似つかわしくない格好の人間がいるのがその証拠だとか。

「胡散臭え……」

なんとテンプレート通りの怪談だ。さっきの骨格標本といい、もう少しなんとかならないのだろうか。

悪霊が取り憑いた絵って。もっと他になんかなかったのか？

「悪霊……」

そんなので怖がつてる吉良も一体なんなんだ。

「……悪霊が本当かどうかはさておき、舞踏会で変な格好してる人ってどこら辺に描かれてるのかな。人、沢山描かれてるから、ちょっとした『ウォーリーを探せ』みたいになってるけど……」

確かに、背景の人間がわらわらいすぎて、この中から特定の誰か

を探すのは至難の技だろう。

「だからそんな噂が流されたんだろうな。嘘かどうか確かめられまい、って」

「えー、そんな性格悪い人いるかなあ？」

「いるさ。どこにでもいる」

本当に善良な人間と、善良なふりした小悪党、果たしてどっちが多いだろうか。

「良い人のほうが、絶対多いよ」

「……何を根拠に」

「根拠はないけど……でも、根拠がなかったらそう信じちゃ駄目なのかな？」

「……………」

……何も知らないくせに、簡単に言ってくれる。

「あれ……わたし、何か気に障ること言っただ？」

「いや……なんでもない。大丈夫だ」

今までの努力をふいにしても、吉良にぶちまけてしまいたくない。

全てを。本当を。

ただの八つ当たりになんかしょうがないのに。

「ごめんなさい、怒らせちゃったね……」

「あー、いや、大丈夫なんだ、本当に。謝らなくていい。こっちこそ悪かった」

絵の前で無様な謝りあいをする。絵の中の女性は優雅に微笑んだままだが、内心では鬱陶しく思っていることだろう。

結局、今日はほとんどろくに取材をしないまま、下校時刻になってしまった。

「あれ、みよちーじゃん。こんな時間まで何やってんのよ？」

美術室を出て部室に向かっていると、階段の踊り場で吉良が声を

かけられた。

「あ、知朱ちゃん！わたしは部活だよ。知朱ちゃんは？」

知朱、と呼ばれたのは、明るい髪をポニーテイルにした女子生徒だった。左右の目元に特徴的なほくろがある。どこかで会った気がするが、思い出せない。

「部活う？ てことはその目隠れくんは、吉良が必死で口説き落とした部員第一号さん？」

「やめてよ、恥ずかしいよ」

「……吉良の知り合いか？」

初対面で人を“目隠れ”呼ばわりする人間に知り合いはいない。

「うん。同じクラスの松前知朱ちゃん。親友なんだ」

「そゆこと。みよちーが可愛いからって手を出したら、アタシが黙ってないわよ？」

出さねえよ。お前は吉良のなんなんだよ。

「もう、知朱ちゃんったら」

「冗談よ。ところで、前にケーキが美味しいお店教えてくれるって約束、覚えてる？」

「……あ」

「やつぱり！ もう、いつ紹介してくれるのかって楽しみにしてたのよ！？」

「ごめん……そうだ、今日行こ！ 今日大丈夫？」

「その言葉を待ってたんだから！ 大丈夫に決まってるでしょ！？」

「……………」

キアアキアと女子特有のテンポで会話する吉良と松前。ついていけねえ……。

「あー、その、なんだ。女だけで帰るんなら、気をつけるよな」

「学舎くんは来ないの？」

「甘いもんそんなに好きじゃないし。二人で約束したんなら、二人で行くべきだろ」

「そっか……ごめんね」

今日の吉良は謝ってばっかだな。

「じゃあわたし、荷物取ってくるから！」

ぱたぱたと吉良が階段を駆け上っていく。

「……アンタにしちゃ、結構大事に扱ってるみたいね？」

「……………」

松前が、どこかで見たような意地悪げな顔で笑いかけてくる。

「なんだかヘンなのに絡まれてんでしょ？ アンタはともかく、みよちーに何かあったらタダじゃおかないんだからね？」

「？ どういう意味だ——」

「お待たせー！」

戻ってくるの早っ！

「んーん、全然待ってないわよ。早く行きましょ？」

「うん。学舎くん、また明日ね！」

「おう。また明日な」

吉良と松前が階段を降りていく。

…… なんとなく、その後ろ姿が羨ましかった。

彼女に会うためにこうなったわけじゃない。

だが、彼女に会えたのはこうなったおかげだ。

…… いつまで隠し通せるだろうか？

いつまで、俺は彼女の前でヒトでいられるだろうか？

もう、そんなに時間は残されていないのかもしれない。

胴体が半分潰れた小グモが、嘲笑うように床を這っていくのが見えた。

学校の七不思議 4（後書き）

油断するとすぐコメディに傾いてしまいます。
そろそろクライマックスなので気を引き締めねば。

学校の七不思議 5（前書き）

もつとも効果的な、殺人の隠蔽の仕方って何かわかるかい？

簡単だ、死体を発見させないことだよ。そりゃそうさ、そもそも死体が見つからなければ殺人“事件”にはならないからね。

自殺に見せかけたり、不可能犯罪に見せかけたり、三文ミステリみたいなびっくりトリックを知恵を搾って考えたりする前に、まず死体を隠す努力をするべきなんだ。

事実、公になっていないだけで、そうやって隠されて今も見つかっていない“行方不明者”はごろごろいるんだろうね。

学校の七不思議 5

わたしね、実は“知らない同級生”に逢ったことがあるんだ。と言っても、顔は見えてないし、話したこともないんだけどね。あは、これじゃ逢ったって言えないかな。

学舎くんに出会った前、まだ新聞部ができてなかったころ、どうしても、部設立のための部員が集まらなくて。

そのとき、“知らない同級生”の噂を聞いて、ちょっとしたおまじないのつもりでやろうと思ったんだ。噂、あんまり信じてなかったし。

だって、『一つ何か大切なことを忘れる代わりに、一つだけ願いを叶えてくれる』なんて、ちょっと都合が良すぎるでしょう？

でも、ここに学舎くんがいるってことは、願いを叶えてもらえたってことなのかな。偶然？ そうかもしれないけど。

だけど、もし本当に全て“同級生”さんのおかげだとしたら。わたしは一体、何を忘れたんだろう？

当然の話ながら、まだ夏どころか梅雨にも入っていないこの時期にプールが開放されているはずがない。

俺たちにできるのは精々、しっかりと施錠された入口の前や高い壁に隠されたプールの周囲をうろろすることぐらいしかない。

「“人魚”さんって……確か、水泳部のエースだったんだよね？」

どんよりと不機嫌な空模様を気にしながら、吉良が呟く。

「らしいな。それこそ半分魚なんじゃないかって言われるほど、泳ぎが巧かったとか」

現在、この学校には水泳部は存在しない。廃部になった年と“人魚”の噂が囁かれるようになったのが同じ年なので、『水泳部は“人魚”が滅ぼした』なんて噂も流れている。

“人魚”——彼女がまだ人間だったとき。

彼女は水泳部のエースで、全国大会に出場するほどの实力を持っていた。

しかし、三年の夏に些細な事故で脚に怪我をしてしまい、その夏は大会はおろか普通に泳ぐこともできなくなってしまった。

そのことに悲観した彼女は、学校のプールで入水自殺してしまう。それ以来、プールで泳ぐと何かに足を引っ張られて溺れかけることが度々起こるようになったという。

「そういえば私、去年泳いだときに急に足が痛くなって、うまく動けなくなっただけじゃあなかったんだけど」

「……それ、足つっただけじゃね？」

そんなことまで自分のせいにされたら“人魚”もたまらないだろう。

「んー、でもあれは確かに……」

ぽちゃん、とプールから水の跳ねる音がした。数秒遅れて、地面に小さな水玉模様がではじめる。

「わわっ、雨降ってきた!？」

「結構勢い強いな、ゲリラ豪雨か？ とりあえず、校舎に戻るぞ」
これ以上体を濡らさないように、俺たちは急いで校舎を目指した。

「あーあ……もうこんなにびしょ濡れだよお……」

吉良が生徒玄関で濡れた髪を拭きながらぼやいた。

雨はまだ止まず、むしろ勢いを増している。下校時刻までに止めばいいんだが……。

「……確か、次で最後だよ、七不思議。“知らない同級生”——」

「ああ、そうだな」

七番目。最後の不思議。

「そういえば、この話だけ妙に細部が曖昧っていうか、なんか変だよね……」

「……そうか？」

「うん。なんて言えばいいのかわからないけど……あ、そうだ」
吉良が、何かを思い出したように、こちらに向き直る。

「学舎くんには言ったことなかったっけ。わたしね、実は——」
そして、吉良は話し始めた。

ようやく雨の勢いが収まってきた。あと数分もすれば止むだろう
か。

「雨が上がったら帰ろうぜ。もう、取材は終わったようなもんだろ」
「えっ？ でも……」

納得していない表情の吉良にだめ押ししてみる。

「最近物騒だしな。なんなら、家まで送るから」

「えっ、本当に!？」

ぱあっと吉良の顔が明るくなる。

ああ、そういえば、俺からこんなことを誘うのは初めてだったか
もしれない。いつも吉良のほうから誘ってきて、俺はいつも適当な
言い訳でかわしているだけだった。

……なんでそんなに、俺なんかと一緒に帰りたがるんだ？

「カバン取ってこいよ。俺はここで待ってるから」

「うん……あれ、学舎くんはいいの？」

「何言ってるんだ。俺はずっと持ってるだろうが」

俺は通学カバンを掲げて見せた。

「持ってたんだ。全然気づかなかった……」

意外そうに吉良が言う。まあ、そうだろうな。

「じゃあ、ちょっと待っててね」

吉良がぱたぱたと駆け出していく。左右のおさげが尻尾のように
跳ねていた。

外から聞こえる雨の音が少しずつ小さくなっていく。そろそろ雨
があがりそうだ。

「……ずっと降つてりゃいいのにな」

こんなこと吉良には言えないが、つい口をついて出てしまった。なんとなく手持ちぶさたなので、カバンからノートを取り出してみる。

何の気なしにばらめくって見る。これは新聞部に入つて以来、取材メモや記事の下書きに使ってきたものだ。当然、俺以外の人を書いた文字はない。

「……おっと」

ノートに挟まれていた紙の切れ端が落ちた。メモか何かだろうか、とりあえず拾つてみる。

『Curiosity killed the cat!!』

「……………」

見覚えのある殴り書き。いつのまにか、こんなところに挟まっていたのか。

「結局、これは誰が書いたんだろうなあ……………」

吉良ではないだろう。吉良はもう少し丸っこい字を書く。それに、吉良にはこんな文面を書く理由がない。

そんなことを思案しながら外の景色を眺めていると、背後からゆつくりと足音が近づいてくるのを感じた。

「吉良か？ 随分早かったな——」

『な』まで言い切ることはできなかった。

突如、俺の後頭部に硬くて重いものが叩きつけられたからだ。

「——っ、ぐあっ!？」

衝撃で身体がよろめき、視界が点滅する。ノートがばさりと床に落ちた。どうにか倒れるのを踏みとどまり、殴ってきた相手を振り向く。

「一体、何を——っうぐ!」

振り向き終わる前に右側頭部を殴られ、今度こそ俺は床に倒れた。

頭が二回も揺さぶられ、視界がはつきりしない。相手が男で凶器は金槌であることはどうにかわかったが、顔はよく見えない。

なんなんだ。一体何が起こってるんだ？　なんで俺は襲われているんだ。いきなり殴られるのは初めてじゃないが、金槌で何度も殴られたことも、殴られる覚えもない。くそつ、とにかくいつから逃げなければ……！

「つぐ、あぁっ！」

立ち上がろうと床に手をつくが、男に思いきり踏まれ、呻き声が出る。左手の骨がみしみし軋む。

「……………」

男は無言でもう片方の足で俺を蹴り、体勢を横向きから仰向けにする。そのまま俺に馬乗りになると、再び金槌で俺の頭を殴りはじめた。

「があっ、ぐっ、ぐぁっ……！」

くそつ、くそつ！　両足と右手は男の両足と左手によって封じられ、左手は痛みで動かない。痛い、痛い痛い痛い痛い痛い！　額に痛みが幾度も打ち付けられ、まるで自分が釘になったかのような錯覚を味わわれる。

そのうち額から血が吹き出してきた。それでも男は殴るのをやめず、むしろ殴るペースを早めてきた。血が目元にまで流れてきて、目に染みて開けていられない。

——めきり、と額から音がした。床に寝ているはずなのに、何故か身体がどんどん沈んでいくような心地よい感覚が襲ってくる。

……参ったな。どうやら吉良との約束は破ってしまうことになりそうだ。

二回目の『めきり』を聞く前に、俺の意識は沈んでいった。

吉良美善は焦っていた。学舎を待たせすぎて彼を怒らせてしまわないか危惧していた。

吉良が部室に着いたとき、またもや部室は何者かに荒らされていた。それを片付けているうちに、予想外に時間がかかってしまったのだ。

すぐに学舎の元に戻り、事情を説明して手伝ってもらえばよかったのだが、彼女にはそいすることが出来なかった。

ホワイトボード一面にでかか書かれた『Curiosity killed the cat!』の文――それを、学舎に見せなくなかったのだ。

「イタズラにしたって酷すぎるよ！ どうしてこんなことするんだろ……」

階段を駆け降りながら吉良は一人憤る。

「学舎くん怒ってないかなあ……」

最後の数段を飛び降り、生徒玄関まで走る。優等生のような見た目には似合っていない姿だった。

「学舎くんっ、遅れてごめんっ！」

生徒玄関につくなりそう叫んだ彼女だったが、そこに学舎の姿はなかった。

「あれ……学舎くん？」

遅いのを怒って先に帰ってしまったのだろうか。狼狽える吉良の足が何かを蹴った。

「これって……学舎くんのノート？」

何故これがこんなところに落ちているのだろうか。と、そのとき後ろから声をかけられた。

「吉良じゃないか。なんでまだ学校にいるんだ？ 今日中間試験

二週間前だから、早く下校しなさいと言われなかったのか？」

「あ……浦賀先生」

声の主は見慣れた英語教師だった。教科書等が入ったバスケットを抱えている。

「浦賀先生、学舎くん見ませんでしたか？ ここで待ち合わせしてたんですけど……」

「学舎？ さあ、見なかったな。先に下校したんじゃないか？」

先生は首を振り、「君ももう帰りなさい。試験前なんだから部活は禁止だぞ」と言って去っていった。

「……やっぱり、帰っちゃったのかな？」

ふと、ノートに何か紙切れが挟まっているのに気がついた。

「これって……」

ホワイトボードと同じ内容が書かれた紙切れ。吉良の心拍数が大きくなくていく。

「学舎くん……」

背筋に言い様がない寒気が走り、吉良は思わずノートを抱き締めた。

空は晴れ、西日が外を照らしている。吉良は、自分が知らないところで何か恐ろしいことが起こっているような、そんな不安に襲われていた。

学校の七不思議 5 (後書き)

怖さが出せない…！

いよいよ大詰めです。あと一、二話で終わるかな？

学校の七不思議 6（前書き）

失って初めて気づく大切さ。

だったら失う前に気づきたかったけど、人生なんて大体そんなもの。
後悔なんて先立たないんだから、先のことを考えようじゃないか。

学校の七不思議 6

学舎学徒が姿を現さなくなつて三日経つた。

初めはあのと看待させたことを怒っているのだと思つた。二日目もまだ怒っているのか、それとも試験前だから来ないだけかと思つていた。三日目にはそろそろ痺れを切らし、そして、気づいてしまつた。

四日目になり、吉良はようやく行動を起こした。

「みよちー、一緒に帰ろ？」

放課後になり、友達の松前知朱が声をかけてきた。

「うっん、ごめんね。今日はちよつと、図書室行こうと思つてるの」「勉強？」

「まあ、そんなとこかな」

適当に言葉を濁して、ふと思う、

(……学舎くんもよく、こうやって何かを誤魔化してたっけ)「……どうかしたの？」

「う、うっん、なんでもないよ」

じゃあね、と手を振る。松前が手を振りかえしてくるのを確認し、吉良は教室を出た。

行き先は図書室。博識で気まぐれで、学舎の数少ない友人である“魔女”がいつもいるところ。

吉良が唯一知る、学舎の“知り合い”のところである。

そして、“魔女”鉋木真女はいた。

岩山のようなシルエットの帽子を被つた少女は、薄暗い図書室の貸し出しカウンターを、生まれたときからここに座っていたかのような自然さで陣取り、寂しそうな、退屈そうな、つまらなそうな表情を浮かべながら文庫本を開いていた。

タイトルは『蜘蛛の糸』。言わずと知れた芥川龍之介の代表作の一つである。

「……うん？ 吉良さん？ どうしたんだい、こんなどこに来て」
鮑木が吉良に気づく。文庫本に琴を挟んでカウンターの端に置き、問いかけてくる。

「ちよつと、鮑木さんに訊きたいことがあつて」

震えそうになる声をどうにか平常に保ち、言葉を紡ぐ。

「学舎くんのこと、知ってる？」

「……吉良さん」

鮑木は感情を押し殺した声音で言う。

「学徒君がいなくなったのは僕も知ってるよ。でも、どうしていなくなったのか、どこに行ってしまったのかは知らない。僕にもわからないんだ」

「……そっか」

と言いながらも、吉良はまったく落胆していなかった。そんなのは当たり前、当たり前前のことを当たり前だと再確認しただけだと、そんな顔をしていた。

「ううん。わたしが訊きたいのは、そういうことじゃなくて。学舎くんのこと」

「学舎くんのことを、教えてほしいの」

鮑木には、吉良が何を言いたいのかよくわからなかった。

「……ううん？ ごめん、吉良さん。君の言いたいことがよくわからないんだけど……」

「その、学舎くんがどうなっているかが知りたいわけじゃなくて、あ、いや、わかるんだったら知りたいけど……とにかく、わたしが知りたいのは、学舎くんの人となり」

「人となり？」

「——うん」

吉良は、いよいよ自らの感情に歯止めが効かなくなってきたのを自覚していた。必死にせき止めていたものが、堰を切って溢れ出そ

「わっ!？」

帽子の鍔で視界を遮られ、思わず吉良は慌てた。

「返すのは学徒君が見つかったからでいいから。僕はもう帰るよ、ちよつと会わなきゃいけないヤツがいるんでね」

「わ、ちよつと、鮑木さん!？」

帽子を正すと、鮑木は既に図書室を出てしまっていた。薄暗い部屋に吉良は一人残される。

「どうしたんだろ……一体」

鮑木が残した帽子を脱ぎ、改めて眺めてみる。

「……やっぱり、ちよつと変な形……」

図書室を出た吉良が次に向かった先は、新聞部の部室だった。

これには特に意味はなかった。学舎が行方不明で、部活が禁止になっっている今、吉良が部室に来る理由はない。

だが。

「もしかしたら学舎くんが来てるかもしれないもんね」

まあ、結局誰もいなかったわけだが。

「……あれ？ だったらなんで鍵が開いてるんだろ……」

部室の鍵は職員室にあるマスターキーを除けば二つしかない。新聞部には顧問がいないので、吉良と学舎がそれぞれ一つずつ管理している。

昨日部室に来たときはしつかり閉めたはず。かといって、たった二人の弱小新聞部に誰か先生が来たとは思えない。いずれにせよ、鍵が開いているはずがないのだ。

「……………」

吉良は嫌な予感に苛まれながら、ゆつくりと室内を見回した。

そして、あった。ここに確かに何者かが来たという証拠がホワイトボードに残されていた。

『本日五時 校舎裏に来ること』

なんとなく見覚えがある筆跡だが、学舎のものではない。

「校舎裏……？」

吉良には呼び出される理由が思い当たらない。少なくとも、告白かカツアゲのどちらかにしか使われないような場所に呼び出される覚えはなかった。

腕時計で時刻を確認する。四時五十分、図ったようなタイミングだ。

「……………」

もし学舎くんがいたら、と吉良は考える。もし学舎くんがいたら、こんなのはイタズラ書きだ、無視してさっさと帰ろうぜって言うんだろう。

そしてわたしが帰ったのを見計らって、一人でそれを確かめに行くんだ。

「……………行こう」

これを書き残した者が何を考えているのはわからない。学舎のことを知っているのかもしれないし、知らないのかもしれないし、悪意を持っているのか善意を持っているのかもわからない。

「でも、たまには部長らしく矢面に立たなきゃ」

学舎くんにはすっかり任せてられないよ。そう呟いて、吉良はホワイトボードの文面を消す。

そして、今度こそしっかりと戸締まりをして、部室を出た。

その決断が、吉良にとって、そして何より学舎にとっても最悪だったことを、吉良はまだ知らない。

学校の七不思議 6 (後書き)

次の話で終わればタイトルのにもいい感じだったんですが、あと二話 + α になりそうです。

学校の七不思議 7（前書き）

人を殺すな。お前らが死ぬ。

学校の七不思議 7

「吉良は、人を殺したことはあるか？」

「ああ、あるわけなかったな。すまん」

「あれな、世間じゃ悪だ罪だ言われてるが——結構楽しいもんだぜ？」

「お前だって、一度くらいはゲームセンターか何かでもぐら叩きはしたことがあるだろう？」

「上手く叩ければすつきりするよなー、あれは。でも、慣れてくると物足りなくなってくる」

「もつと殴り心地のいいもの、殴り甲斐のあるものを殴りたくなってくる」

「俺もな、この仕事やってるとストレスが溜まるんだよ」

「何度教えてやっても理解できない奴、授業中に寝ちまう奴、私語を慎まない奴」

「駄目だってわかってるんだけどなー、どうしても腹がたつし、殴りたくなる」

「それで、ついに我慢が出来なくなつて、気が済むまで殴ってみた」
「爽快だった。溜まりに溜まっていたストレスが全部吹っ飛んだよ。もぐら叩きとは比べようのないくらい爽やかな感覚だった」

「それ以来病みつきになっちまったよ。いつかやめなきゃ、とは思っちゃいたが、とうとうやめられなかった」

「そうそう、お前たちが見つけた足、あれは確か最初に殴った奴のだったかな」

「あれを見つけないければ、俺も余計なストレスを溜めなくて済んだのにな」

「わかるか？ あいつ——名前忘れたけど、あいつが死んだのも今からお前が死ぬのも、つまるところ自分自身のせいってことだ」

「……………」
目の前の教師——浦賀真の独白を聞き終わった吉良は、何も言えなかった。

言いたいことは沢山あった。『そんな下らない理由で人を殺したんですか』、『人をなんだと思ってるんですか』、『“あいつ”って学舎くんのことですか』、『まさか学舎くんのことまで殺したんですか』——しかし、今はそんなことを悠長に訊いている場合ではなかった。

目の前に金槌きねづちを構えた、既に何人も殺しているであろう人殺しを前にすれば、まずは身の安全を考えるのが先だ。

「……い、ひいッ……！」

「あ、いいなその表情。モチベーションが上がってくる」

どうしよう。どうすればいいんだろう。逃げなきゃ。来るんじゃない。大人しく帰っていればよかった。頭の中で思考が渦巻き、ますます吉良を不安定にする。

「こっ、この人殺し！ 狂人！ 来ないで！」

「うん、そうだな」

と言って歩みを止めるわけはなく。聞き流しつつ普通に近づいてくる。

「……っう、ああっ！」

ここに来てようやく、吉良は逃げるという選択に至った。当たり前だ。徒手空拳、格闘技や護身術を身に付けていない普通の女子が、凶器を手にした成人男性を相手取れるわけがない。

何も考えずただただ転進する。行き先はなく、一刻も早くかの男から逃げ出したいという思いだけでひたすら走っていった。

「……逃げたか」

ま、そりゃそうだよなー、と呟く。彼としては逃げないでいたほうがやりやすかったのだが、まあそれはしょうがない。

「……まあ、でも、逃がすわけにはいかないんだよなあ」

どこか諦めたような面持ちで、浦賀はのんびりと歩き出した。

おかしいとは思っていた。

「なんで今日に限って、誰も残ってないの!？」

校庭を見回しても、校内を見通しても、校外を見渡しても。誰も、どんな人影も見つけることができなかった。

試験二週間前——部活動禁止週間。散々耳にタコができる程言われてきたことを、吉良はすっかり忘れていたのだ。

しかし、そうやって闇雲に走るのにも限界がある。

一心不乱に全力で、ずっと走り続けていた吉良の足は、いつしか棒のようになっていた。

「——っ、はあっ、はあっ……」

プールの影にさしかかった辺りで、ついに吉良は足を止めた。走らなければ、逃げなければという焦燥があるものの、しかし酷使された足はストライキを起こしている。

「……あれ」

なんだか妙に頭が熱い、と思っていたら、鮑木にもらった帽子を被りっぱなしだったことに気がつく。そういえば浦賀の視線も、心なしに頭部に向いていたような……。

「そうそう、確か、なんだか意味深なこと言っただ貸してくれたんだっけ」

鮑木さんが妙に意味深なのはいつものことだけど、と微妙に失礼なことを呟き、帽子を脱ぐ。

すると。

「あれ……?」

と、吉良は二回目の言葉を漏らした。

帽子の裏にポケットのようなスペースがあり、そこに紙切れのようなものが入っていた。取り出すとそれは小さく折り畳まれた折り紙のようで、目立つところに『大ピンチになったら開けること』と

書いてある。

「大ピンチ……」

教師の恐るべき秘密を知ってしまい、さらに命を狙われている。まごうことなき大ピンチだった。

というわけで紙を開いてみる。手書きで、次のような文章が書かれていた。

『吉良さんへ

これを見ているということは、恐らく貴女は現在なんらかの危機的状況にあるのでしょう。

ここから先はその前提で話を進めますが、そうでないのなら今すぐこの紙を元に戻し、ここから先は読まないでください。

多分貴女は他の誰かに助けを求めようと、校内を回ったでしょうが（あるいは、そうしようと思っていたでしょうが）誰にも会えなかったことでしょう。

それは、部活動が行われていないからだけではありません。私ごとと鮑木真女が今日は誰も学校に残らないように取り計らったからです。

何故そんなことをするのか、と貴女はお怒りになるかもしれませんが。もしかしたら貴女の危機も、それによって悪化しているのかもしれないと危惧しています。

しかし、私にはそれをしなければならぬ理由がありました。誰かが校内に残っていて、私が行くことを目撃しないようにするため

単刀直入に言いましょう。貴女がこれを見ているとき、おそらく私は、学舎学徒の死体を掘り起こしています。

貴女には多分、「学徒君のことは知らない」と言っただけですが、

それは半分嘘になります。学徒君が行方不明なのは、十中八九“足の犯人に殺されたからだと踏んでいます”。

遺体の在処は見当がついています。校内で殺したのなら、それを学外へ運ぶのは大変でしょうから、校内に隠したはず。“足”をわざわざ学校の焼却炉で焼いたのも、遺体の処分に困っていたからでしょう。

場所をあえて書きません。書いたら貴女は来てしまうでしょうから。

彼がどんな死に方をしたのかはわかりませんが、いずれにしろ見て気分が悪くならないようなものではないと思います。貴女だって彼の無惨な姿を見たくないのでは？

話がだいぶ逸れてしまいました——以上が、私が校内から人払いをした理由です。

次に、貴女の危機についてですが、私の予想が当たっているなら貴女もまた“足”の犯人に襲われているのでしょう。

とりあえず今は学校から出てください。人通りの多い場所に出、犯人を撒いてください。

それが不可能な状況なら、隠れてやりすごし、携帯で誰かに助けを求めてください。

本当に申し訳ありませんが、今の私にはこの程度の助言しかできません。

貴女の無事を祈っています。

鮑木真女より

追伸

助けを求めるのなら松前さんにしたらいいと思います。』

「……………」
びっしりと文字が埋め尽くされた紙片を畳み、思うところは多々あるけれど。

「……鮑木さん、手紙だとキャラがだいぶ違うんだなあ……」
とりあえず、そこに突っ込んでみた。

沢山の情報を得られたものの、あまりにも情報が多すぎ、そのわりに今すぐ役に立ちそうな情報はほとんどなかった。

「そっか……学校出れば良かったんだ。わたし馬鹿だ……」

そんな単純なことに気づかなかった自分のまぬけさを恥じつつ、ふと思ひあたる。

（今、学校にはわたしがいて、先生がいて。そして、鮑木さんがいて……）

今、浦賀がどうしているのかはわからない。多分、吉良のことを探しているのではないだろうか。

もし、学校のどこかで学舎の死体を掘り起こしているという鮑木と、凶器を構えてさまよう浦賀が鉢合わせたら……？

「……鮑木さんが、危ない？」

手に力が入り、握っていた紙片を思わずぐしゃぐしゃにしてしまう。だが、吉良はそれどころではなかった。

「……鮑木さん……鮑木さん！」

先程のこと——恐ろしい体験のせいで忘れていた数十分前のことを思い出す。情緒が不安定になっていた吉良を抱き締め、落ち着かせてくれたこと。さらに、吉良の身を案じてくれたのか、こんな紙を用意していたこと。

あの金槌が鮑木に振り降ろされるのかと思うと——吉良の身に怖気が走り、思わず自分の身体を抱き締めた。

「……っ！」

疲れを忘れて、吉良は走り出した。見つけた所で何か助けになるとは思えない。むしろ余計な事態を招くだけかもしれない。

だがそれでも、走らずにはいられなかった。

沈みだす陽を背に、吉良はもはや取り返しのつかない闇へ足を踏み入れようとしていた。

学校の七不思議 7（後書き）

話がまったく進まない…

次回で『学校の七不思議編』は終了…の予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1145w/>

放課後ホーンテッド

2011年11月24日22時52分発行